

広告代理店も参加するコンペティションで 庫元ゼミが協賛企業賞を受賞

現代文化学部情報文化学科・庫元ゼミの3年生10名が、今年9月、雑誌「販促会議」が主催する「第5回 販促会議企画コンペティション」で協賛企業賞を受賞しました。これは協賛企業からの課題に対して販促アイデアを競うもので、庫元ゼミでは三井石油の課題である「目に見えて分かる来店のきっかけ」に応募。窓そうじにメッセージを掛け合わせた「メッソージ」という企画が、応募総数1926点の中からファイナリストに進出し、22点の各賞の一つに選ばれました。

課題に対するアイデアは全員で出し合い、ブラッシュアップ。「誰にでも伝わるにはどうしたら良いか、みんなで何度も話し合いながら、プレゼンテーションではビジュアル面を工夫しました」と話す、プロジェクトリーダーを務めた林花織さん。ゼミ長の古田千佳さんは、「ゼミ



「おつかれさま」などが書かれたメッセージ付きタオル「メッソージ」。お客さんとスタッフとの会話の架け橋になることが目的。



庫元正博教授とゼミのメンバー

現在はコスメ企業へ販促イベントを提案するなど、10人全員がそれぞれプロジェクトリーダーを経験しながら、個々の持ち味を

が始めたばかりの5月からの取り組みで、最初は互いに手探り状態でしたが、この受賞によってグループで創り上げることの可能性を実感。大きな自信になりました」と話します。

発揮しています。これまでも企業や行政と組んで、数々のプロジェクトを成功させてきた庫元ゼミ。こうしたチャレンジ精神が、学生たちに広がることを期待します。

高齢者の方々をおしゃれでキレイに—— 「ビューティーキャラバン」に参加し、介護施設へ



NPO全国福祉理美容師養成協会主催東海ゴム株式会社支援による「ビューティーキャラバン」は、介護施設で生活する高齢者の方々にヘアメイクなどのサービスを提供し、おしゃれを楽しんでもらう活動を続けています。生活環境学部環境デザイン学科の青山ゼミ・平林ゼミでは早くからこのイベントに協力し、ゼミ生たちがデイサービス施設などを訪れ、高齢者の方々にファッションコーディネート提案し



ています。同学科4年の加古彩織さん、大橋杏香さん、湯本美穂さんは、3年のときから「ビューティーキャラバン」に参加し、たくさん的高齢者の方々と接してきました。

「授業で学んだカラーコーディネート知識をいかし、一人ひとりに合う色や柄を提案します」と話す大橋さん。加古さんは、「最初は恥ずかしがっていた方が、一緒に選んだ衣装に着替えてプロにお化粧をしてもらうと、ニコニコ顔

になられるのがうれしい」と話します。また湯本さんは、軽度認知症の方と接しながら、「コミュニケーションの難しさを実感することもあります。変身後の明るい表情を見ると参加してよかったと思います」と答えてくれました。

「ビューティーキャラバン」で得たさまざまな経験が、少子高齢化社会で活用されることを期待します。



互いに学び、刺激し合い、成長する 幼稚園の保育ブランド「縦割り保育」



児に対する思いやりや優しさが育ち、年下児には年上児に憧れをもって接する中で「自分もやってみたい」という気持ちが芽生えることです。また年下児がいることで今までできなかったことにも挑戦する年上児もいます。子ども同士が見て学び、刺激し合い、遊びを伝承し、互いに成長していける環境こそそのメリットです。

その反面、さまざまな葛藤もあり

ます。年上児は年下児に対して配慮しきれない場面に戸惑ったり、ルールが理解できないために遊びのリズムを崩されたりします。園生活の基点であるクラスを縦にする中ではさまざまな場面で待つことや我慢しなければならぬこと、許すことが必要となってくるのです。

このような葛藤も自ら乗り越え、体力も能力も明らかに違う存在と生活していく

ります。年上児は年下児に対して配慮しきれない場面に戸惑ったり、ルールが理解できないために遊びのリズムを崩されたりします。園生活の基点であるクラスを縦にする中ではさまざまな場面で待つことや我慢しなければならぬこと、許すことが必要となってくるのです。

このような葛藤も自ら乗り越え、体力も能力も明らかに違う存在と生活していく



上靴に履き替えた年少児の靴のゆがみを何気なく直してくれる年長児。

ことで多くの感情体験を生み、人とかかわる力を得ていきます。保育者は発達の違いを押さえながら互いに学び合える環境を整え、縦割りの一員として存在することが大切です。単なる短期間の交流にとどまらず、生活をともにする「クラスを縦編成にした縦割り保育」をこれからも続けていきたいと願っています。



年長児が年下の子どもを楽しませている。



出席シールを貼る場所を年長児が教えてくれている。

創造力豊かな遊びの場をめざして 有志ご家族の協力で「園庭ワーク」を実施

幼稚園園庭は豊かな自然環境をいかし、子どもたちが心身ともに健やかに遊ぶように考えて作られてきました。園庭の中央にある築山の起伏を利用した遊びや手作りロープ遊具などで子どもたちは毎日想像力豊かに遊んでいます。ときには山の一部が崩れて雨とともに土が溝に堆積する、あるいは道路工事ごっこで園庭がでこぼこになるなど、子どもたちの遊びにより園庭自体が姿を変えていきます。有志の家族のご協力を得て行う年4回の「園庭ワーク」では、これらの修復とともに子どもの発想をいかした遊具作りも行います。

9月7日の第3回園庭ワークでは、プールやウォータースライダーの片付け、秋の運動会に向けての整地や日よけ作り、側溝の掃除、ドラム缶で焼くピザ作りが行われました。

日よけはお父様たちが中心となって作ります。この日よけがあるおかげで子どもたちは気持ちよく砂遊びが楽しめ、また運動会のときに



は涼しい応援席になります。お母様や子どもたちは園庭の石拾いや整地を行いました。

ピザ作りは米粉から生地を作成。トッピングは幼稚園で育てたピーマンやバジル、さらに造形の先生お手製のベーコン。ドラム缶で焼き、みんなで食べたピザは格別のおいしさでした。

園庭ワークには在園児親子の他に卒園生や



入園希望の親子、今年度より始まった親子教室の参加者、またホームページから興味を持たれた未就園児親子も楽しんで参加しています。これからも園庭ワークで園庭が在園児のよりよい生活の場となり、卒園後も訪ねたい場であり、さらに地域に開かれた親子の学び・育ちの場になるようにと願っています。

高校生が作った「ケータイ・スマホ・ハンドブック」が書籍化され一般発売へ

約1年前から企画
生徒の厳しいチェックも

生徒たちの自主的な活動で作られ、5年にわたって発行され続けているケータイ・スマホハンドブック。「ケータイの持つ利便性とさまざまな弊害を、学院内だけではなく広く社会へも発信していこう」という思いのもと、このたび「先生・保護者のためのケータイ・スマホ・ネット教育のすすめ」「中高生のためのケータイ・スマホハンドブック」と2冊に分けて書籍化。8月9日から書店で販売されています。その後予想以上に反響を呼び、初版は2ヶ月で完売。現在第2版がアマゾンの書籍部門で第4位の売れ行きだそうです。

このハンドブックは2008年3月に中学生徒会で宣言された「反いじめ憲章」を継承し、当時の高校1年有志生徒40人が学習会を結成して作成したものです。2009年3月に第1版を発行して以来、5年間でのべ100人近い生徒たちが議論に参加。毎年版を重ね、今年の3月には第5版が発行されています。

今回の書籍は約1年前に企画され、第5版をベースに作成されました。監修の名古屋大学名



宮之原 弘先生

誉教授・今津孝次郎先生を中心に、高校の生徒支援担当でありスクールソーシャルワーカーでもある宮之原弘先生をはじめとする各先生方、ハンドブック作成に関わる生徒たちも制作に参加。みんなが理解しやすく、読みやすいようにと、ときには生徒たちの目線で厳しいチェックも入りました。また表紙には生徒が書いたケータイのイラストが起用されました。

生徒たちが自ら考え、作る自立・自律・連帯を具現化

このケータイ・スマホハンドブックは本校の教育理念である自立・自律・連帯が具現化したもの。先生にいわれたからではなく、生徒たち自身が主体的に取り組むこの活動は、まさに“Dignity”の成果といえるでしょう。「ケータイのさまざまな問題について、自分たちで調べ、解決方法を見いだしていく、まさに総合的な学習です。ケータイが持つ問題点に気づき、学ぶことで強度のケータイ依存症から立ち直った生徒もいます」と宮之原先生も話します。

先生と保護者向けの書籍には、新しいメディアコミュニケーションとしてのケータイ・スマホや使用する青少年の現状、またコミュニティサイトやリスクなどさまざまな観点からケータイ・スマホについて考える内容が書かれています。一方、中高生向けの書籍にはケータイやスマホの基本をはじめコミュニティサイトなどのリスク、いじめの問題やネット上のエチケット“ネチケツ”について書かれ、安全に賢く使うために大切なことも記されています。



ケータイはルールを守って使えばとても便利なものです。しかし使いすぎるとやがて自分自身がケータイやスマホに支配されてしまうようになります。コミュニケーションは、言葉だけでなく表情やジェスチャーを加えることでより正確に相手に感情を伝えることができます。学校はもちろん、家庭でもフェイス-toフェイスのコミュニケーションの大切さを教育していただきたいと思います。

書籍となってこれで終わりではなく「今後も引き続き生徒たちが中心となってハンドブックを発行していきたい」と宮之原先生は話します。第6版も現在企画中ハンドブック作成を通じて“Dignity”の精神は脈々と生徒たちに受け継がれていきます。



全国ディベート選手権に中学・高校がそろって出場

東京・東洋大学で8月10日から行われた「第18回全国中学・高校ディベート選手権(ディベート甲子園)」に中学と高校の生徒たちがそろって出場しました。

11年ぶり2回目、また高校生も一緒の出場とあって中学の生徒たちも勇気づけられ、本番では堂々とディベート。予選リーグを1位で通過し、決勝トーナメントではベスト8位に入賞、輝かしい成績を残しました。

対戦相手は愛知県代表ばかりであったことはすこし残念でしたが、愛知県のレベルの高さをあらためて実感することもできました。これをきっかけにディベート部を作りたいとの声も。高いディベート力を持つことは、将来社会で必ず役立ちます。学院ではこれからも生徒たち一人ひとりのディベート力を伸ばしていけるよう頑張っていきます。



中学グリークラブが3年連続全国大会出場 高校は中部大会銀賞、大学は6年連続で全国へ



中学グリークラブ



小原 恒久先生

9月28日に長野市で行われた「第66回中部合唱コンクール」に中学、高校、大学のグリークラブが出場。中学は3年連続で金賞、大学も金賞、高校は銀賞を受賞し、中学と大学のグリークラブは見事全国大会への出場を果たしました。

中学のグリークラブには現在57人が所属。毎朝練習も行い、授業後はストレッチや発声など基礎的なトレーニングから練習を行っています。「大会に出場する学校は毎年レベルが上がリ、特に名古屋はレベルが高い。その中で全国大会連続出場を持続することは大変」と指導にあたる小原恒久先生は話されます。また合唱はメンタルハーモニーであることから「生徒たちには心の輪を大切に、お互いに協力しあうように」と、いつも話されています。

グリークラブの雰囲気はとても和やかで、上級生が下級生をフォローする姿もよく見られま

す。「連続出場のプレッシャーはありましたが、みんなで頑張ろうと励まし合いながら練習しました」と部長の佐々木彩乃さんの言葉や、副部長の山田真唯さんの「後輩の中には全国大会出場は当たり前」と思っている子もいて、そうではないことを教えるのは大変でした。全国大会に出場することは大変名誉なことであり、そのためには先生のいうことをきっちり聞いて練習することが大切だと教えました」という話からもみんなで心をひとつにして練習した様子が伺えます。

練習では発声がうまく出ない下級生のために3年生が細やかな指導も行います。口を大きく開ける、おなかから声を出すなどの基本をしっかりと指導。「1年生のときは全然声が出ていなくても、頑張っ練習して2年生でパートリーダーになった子もいる。毎日の努力で今があるということを後輩たちにも教えています」と佐々木さんは話してくれました。

10月27日に広島県福山市で行われた全日本合唱コンクール全国大会では「春は来ぬ」「草に寝て」の2曲を演奏。「笑顔で楽しくステージを楽しんでください」という小原先生の言葉に励まされ、全員がベストを尽くして歌い、今までで最高のステージとなりました。佐々木さんも「とても気持ちよく楽しんで歌えました」と話します。また山田さんは「全国大会に行っただけで満足せず、それよりさらに上をめざしたいと思いました」とあらためてグリーに対する思いを強くしたようです。

中学、高校でのグリークラブの活動を通して結ばれた固い絆は、大学になっても続いています。現在27名が所属する大学のグリークラブ



中学グリークラブ部長の佐々木さん(左) 副部長の山田さん(右)

も11月23日に行われる全日本合唱コンクール全国大会に6年連続で出場します。中部大会では無伴奏女声合唱のための「うたおり」の中から「薔薇」「崖」「戦場」の3曲を歌い、見事金賞を受賞しました。部長を努める清家夕貴さんは中学からグリークラブに所属。それぞれに学校のカリキュラムや就職活動でなかなか集まるのが難しい中、一人ひとりが自主練習を行い、短期集中で練習して大会に備えています。

中学同様、高校も大学も指導を行う小原先生はグリークラブの魅力「仲間の絆が強くなること」といわれます。OG会「エシュコル」の活動も活発で、卒業後も合唱を通してみんながつながっています。心をひとつにして歌うグリークラブの輝かしい活躍を今後も期待します。



高校グリークラブ



大学グリークラブ